
キュアグラス ～ただ雑草のように～

プシエミスル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キュアグラス くただ雑草のようにく

【Nコード】

N5548Z

【作者名】

プシエミスル

【あらすじ】

あてもなく、たださすらいながら戦い続ける一人の女がいた。人から好かれず、また彼女も好かれようとはしない。彼女は一体何を望むのだろうか。その名はキュアグラス。雑草という名のプリキュア……。

プロローグ

「わ……わかりましたあ！もう、二度としませんから命だけはあ
~~~~~！」

「本当ね。もし今度繰り返したなら、その命を……。」

「ほ……本当ですってば~~~~~！！！」

私が今問いただしているのは、あるスーパーマーケットから万引きをしようとした少年だ。偶然それを見た私は少年に『ある程度』制裁を加え、万引きを未然に防いだ。彼も二度としないと誓った。本当かどうかは疑わしいが……。

私の名前は芝草秋香<sup>しほくみしゅうか</sup>。歳は15、中3だ。我が家は転勤が多い家で、ほぼ1年ごとに転校を繰り返している。だから私には友人がいない。友人をつくる気もない。親から友人をつくれくれと言われているが、正直うっとうしい。つくってもすぐに疎遠になってしまうのなら、そんなものはいらぬ。

そんな私は現在、四つ葉町という町に住んでいる。別名クローバータウンと呼ばれているそうだが、私にはどうでもいい事だ。

今日は日曜日、私はとぼとぼと町を散策している。でかい怪物が跋扈している以外は何とも平穏な町だ。……ん？でかい怪物？

## 人物紹介

芝草 秋香 (しばくさ しゅうか)

1996年7月21日生 15歳

両親と自分の3人家族

明るくて社交的な他のプリキュアたちと違い、あくまで孤独を貫き、誰とも関わろうとしない少女。口数も少なく、つい毒を吐いて周りに嫌悪感を与える。

## プロローグ（後書き）

四つ葉町で出会った4人のプリキュア。キュアグラスとして共に戦ったものの、秋香は彼女たちとは関わろうとしない。己は雑草、雑草なのだから。

次回「孤高」 奴とは、絶対に関わらないほうがよい。

## 孤高

四つ葉町を襲っている巨大な怪物。それに立ち向かっているのは、私と同じ年代であるう4人の女。その奇怪な容姿。あの女たちも私と同じ『プリキュア』なの・・・かな。

「エエエエエエエエイ!!!!!!」

巨大なツインテールをした金髪の女が、怪物に向かって飛び膝蹴りをかます。それに続いて他の女たちも攻撃する。

『プリキュア・クアドラブル・キーーーーッッッック!!!!!!』

4人の息の合ったキックが怪物にダメージを与える。だけど怪物にはさほど効果は無いみたいだ。逆にその圧倒的な力で女たちを圧倒する。

・・・つたく、せつかくの日曜日をこんなつまない事で潰さないで頂戴。

『チェンジ・ザ・キュアグラス!』

服のポケットから、変身アイテム『グラス・ロッド』を出して、私はいつらと同じプリキュアへと変身する。

『我は無限の生命の証、キュアグラス!!!』

・・・雑草とは違ってても違ってても生えてくるもの。だから無限の生

命なのだ。

「……………ツツ!!」

バツシー————ン!!!

「ウオオオオオオ!!!!!」

私は無言で怪物にパンチをお見舞いしてやる。急所に当たったのか、怪物が地面に倒れた打ち回る。

「た……助かったあ……。」

「もたもたするな、もう立ち上がってるぞ。」

「え？」

ベシツツ!!!!!!

警告した時にはもう遅かった。怪物はもう立ち上がり、ツインテールの女を殴り飛ばした。

「ピーチ!大丈夫!？」

へそを出した女と赤い服の女がピーチと呼ばれた女に駆け寄る。隙を見せたらだめだったのに。

「私がやるしかないか。」

私はロッドを装備し、自らの技を発動させる。

『地上に生える無数の草の魂よ、奴にからみつき、動きを封じよ。』

『プリキュア・グリーングラス・ロープ!』

ロッドの先から草で編んだロープが放たれ、怪物の体をごんじがらめにし、動きを封じさせる。

「動きが止まった……?」

「何もたついているの?止めを刺せ。」

「……う、うん!」

ピーチとその他の連中も、必殺技を繰り出した。

「クローバーボックスよ!私たちに力を貸して!」

「プリキュアフォーメーション!レディ……ゴー!」

「ハピネスリーフ、パイン!」

「プラスワン、フレアーリーフ、ベリー!」

「プラスワン、エスポワールリーフ、ピーチ!」





くどいなあ。私は歩んでいた足を止め、後に振り返る。そして・・・

「ッ!」

バキィッッ!!

「タツハアア!!!」

ラブと名乗った子の顔面を、思いっきり殴り飛ばした。

「ラブ!」

「ラブちゃん!」

「ラブ、大丈夫!？」

「う・・・うん何とか・・・。」

「ちょっとあんた!何て事するのよ!」

「今すぐラブに謝って!!」

青い髪をしたモデル風の子と藍色の髪の子が突っかかってきた。面倒な連中だ。

「私、馴れ馴れしい人間は嫌いな。だから殴ったの。」

「な・・・何よその態度!」

「初対面の人間にそこまで親しくする義理は無いわ。そうでしょう。」

「……あなた……!!!!」

「……」

言いたい事は言った。呆気にとられている奴らを背に、私は散歩の続きに入る。無駄な体力を使った。

「……何なのよあいつ、人を助けておいてあの態度は……!!」

「それに一言も謝らないで。今度合ったら……」

「ラブちゃん、鼻血が!」

「こ……これ位大丈夫……だよ。」

明くる月曜日、私は今度転入する『公立四つ葉中学校』の門をくぐった。クラスは3年の4組目。

「今日からこの4組に転入した、芝草秋香さんだ。」

紹介をされ、席につかせられる。クラスメートから質問はされたが、適当にあしらってやった。

「転入生？」

「3年の芝草秋香さんですって。」

「どんな人だろう。ねえせつな、見に行ってみようよ！」

「ちょ、ちょっとラブ待って！」

「あ、あの人かな？……て。」

「あ……あいつ！昨日ラブを殴り飛ばした……！」

「え……そうだっけ？顔良く見ていなかったからわかんないなあ。」

「ラブ、あまりあいつには関わらないほうがいいわ。」

「そ……そうかなあ。」

「顔も全然笑っていないし、一言もしゃべろうとしないじゃない。放っておきましょう。」

「で……でも……。」

同じプリキュアなのにとラブは言おうとしたが、せつなに引っぱられ、言えなかった。

「どうぞせまた転校するんだもの。」

自分に言い聞かせるように、私はつぶやいた。

## 孤高（後書き）

学校に転入した秋香に関わろうとするラブ。軽くあしらってやる秋香。

いまの彼女には、ラブはしつこく付きまとうシラミでしかなかった。

次回「憎い奴」しかし、それでも女は興味を持たれる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5548z/>

---

キュアグラス ~ただ雑草のように~

2011年12月18日23時54分発行